

植民地末期朝鮮におけるある転向者の運動

— 姜永錫と日本国体学・東亜連盟運動 —

松 田 利 彦

はじめに

I 植民地朝鮮における「転向」

II 日本国体学

III 東亜連盟運動

おわりに

はじめに

植民地時代末期の朝鮮に現れた際だった社会現象の一つに、朝鮮人共産主義者の大量転向があげられる。朝鮮総督府警務局の作成した1938年末調査の統計によれば、「在監思想犯人」1298人中、日中戦争勃発前の転向者は349名、その後の転向者は427名、計776名に達している¹⁾。

朝鮮人の転向という問題に多少なりとも関連をもつ研究成果はこれまでに少なくないが、そこには2つの問題点が見られるように思われる。

第一に、朝鮮人共産主義者の転向という問題は、必ずしも研究上のテーマとして定着しておらず、しばしば親日派研究という枠組みの中に埋没していた。「転向」を書名に掲げた数少ない書である金石範『転向と親日派』においても次のような記述が見られる²⁾。

「社会主義運動と結合した植民地民族解放闘争、あるいは民族主義者たちの民族独立闘争の過程での『親日』、『民族反逆』行為を、帝国主義（天皇制権力）に対する独立闘争を絶対的価値規準として基本軸に置くことで、転向と定義し得る」。

このような捉え方の結果として、転向は、「親日」（＝「民族反逆」）行為として、「強く倫理性をとまなう」³⁾ 取り上げ方をされることになった。過去の清算という現実的課題からこのような捉え方が生まれてくるのは一面当然のことではあるが、反面、結果的には、朝鮮における転向を、断罪の対象とする以上の広がりをもつ研究に持たせにくくなっていることは否めないだろう。親日派朝鮮人の問題を「転向」という近代日本史研究上にも共通する問題と結びつけて考察しようとした着想を生かすならば、朝鮮人転向者の内的論理を日本人の場合を参照しつつ探

求し、この問題の持つ潜在的な広がりや深さをより鮮明にする試みもなされてよいと思われる。

なお、その際、共産主義者・社会主義者の転向には、民族主義者の親日化と同種の問題が含まれるにしても、そこに別個の論理が存在することも無視すべきではなかろう。したがって、本稿では「転向」の概念として、「共産主義者の共産主義抛棄を意味する……いわば小括弧にくくられる転向」⁴⁾ というごく狭い定義を採用しておく。

さて、問題点の第二は、これまで朝鮮人転向者ないし親日派の思想的変遷の連続と断絶を跡づける際、多くの場合、その素材が文学者・思想家に偏り、個々人の内面の論理や心理を追うことに沈潜する傾向が見られた点である⁵⁾。その結果として、転向者の内的論理がいかなる政治的活動として具体化し、それが当時の社会状況といかに切り結んだのか、という点にまで関心を向けた研究はなお少ない。既に日本人の転向に関しては、「転向のなかに運動への意志の断片が潜んでいること」に光を当て、共産主義者が転向後に行った運動を検証した研究が現れている⁶⁾が、朝鮮人転向者の研究についてもそのような視角を設定することは可能なのではないだろうか。

これらの点に鑑み、本稿は、朝鮮人転向者の内的論理を考察しながら、それがいかなる具体的活動として発現したかを検討しようとするものである。このような課題に接近するための材料として、本稿では、元朝鮮共産党員姜永錫が、転向後に関わった日本国体学会の活動や東亜連盟運動に着目した。もとより、社会運動家は、文学者に比べると自ら残した文章が乏しく、史料制約は小さくない。姜永錫も例外ではなく、これまでこの人物を取り上げ評価しようとした研究も存在しない。本稿も、姜の活動について、行論上、確証を得られないまま紹介した部分もあることを了解願いたい。

I 植民地朝鮮における「転向」

1 朝鮮人共産主義者の転向論理

朝鮮人共産主義者は、自らの転向を説明ないし合理化するために、どのような内在的論理を用意したのだろうか。本章では、日本人転向者の場合とも比較しながら、行論に必要な限りで特徴と思われる点を指摘したい。

周知のように、日本においては、1933年の獄中共産党幹部の転向声明以来、大量転向が生じた。これに対して、朝鮮においては、やや遅く1935年頃になってから転向が一般化したとする見解がある⁷⁾。しかし、統計上の数字から見る限り、転向者の数が急激に増加しはじめるのは1932年から33年にかけてである⁸⁾。もっとも、そのことは、転向という現象が、日本と同じ勢いで朝鮮の共産主義陣営を突き崩していったことを意味しない。

植民地末期朝鮮におけるある転向者の運動（松田）

1936年6月、朝鮮全体には治安維持法違反で受刑している者は692名おり、この内、転向者は166名（24%）、準転向者は162名（23%）だった（これ以外は、非転向者169名－24%、未調査195名－29%）。翌1937年6月においては、治安維持法違反全受刑者553名中、転向者は179名（33%）、準転向者は140名（25%）を占めた（非転向者は116名－21%、未調査は118名－21%）⁹⁾。他方、1936年5月、日本においては全国の治安維持法違反受刑者は438名で、転向者241名（55%）、準転向者83名（19%）だった（非転向者は114名－26%）。

日中戦争前のこの時期、朝鮮の方が日本より治安維持法違反受刑者が多かったこと（人口比では4～5倍に当たる）、にも関わらず、転向者（準転向を含む）の比率は日本の方が高かったらしいことが判る。

さらに興味深いのは、転向動機の違いである。上記の朝鮮と日本の転向者・準転向者の転向動機を表1にまとめてある。

官憲による機械的分類は、転向者が抱えていたであろう複雑な葛藤をいささか単純化しているにしても、この表からはいくつかの注目すべき傾向を読みとることができる。「拘禁ニ依ル後悔自新」は、朝鮮では3割以上を占めるのに対し、日本では1割以下であること、反対に、

表1 朝鮮と日本における転向者・準転向者の転向動機

転向動機	朝鮮（1936年6月）		朝鮮（1937年6月）		日本（1936年5月）	
	人数	%	人数	%	人数	%
「拘禁ニ依ル後悔自新」	113	34.6	101	31.7	25	7.7
「近親愛其ノ他家庭関係」	111	33.8	112	35.0	138	42.7
「訓諭教誨ノ結果」	66	20.1	65	20.4	—	—
「主義理論ノ精算」	14	4.3	14	4.4	40	12.3
「国民的自覚」	7	2.1	5	1.6	73	22.5
「信仰上」	6	1.8	10	3.1	20	6.2
「性格健康等身上関係」	3	0.9	8	2.5	24	7.4
「其ノ他」	8	2.4	4	1.3	4	1.2
計	328	100.0	319	100.0	324	100.0

出典：「朝鮮」－「思想犯受刑者諸表」（『思想彙報』第12号，1937年9月）185頁，「日本」－池田克「左翼犯罪の覚え書」（池田克，毛利基編『防犯科学全集』第6巻，中央公論社，1936年）224頁。

注：「転向動機」の項目は、「朝鮮」の方の典拠資料（「思想犯受刑者諸表」）の表記に合わせた。「日本」の方の典拠資料（池田克「左翼犯罪の覚え書」）では、「拘禁ニ依ル後悔自新」が「拘禁ニ因ル後悔」，「主義理論ノ精算」が「共産主義理論精算」と表記されている以外は、仮名遣いの違いにとどまる。なお，「訓諭教誨ノ結果」に該当する項目は，「日本」の方の典拠資料には存在しない。

「主義理論ノ精算」は朝鮮が4%程度であるのに比し、日本は10%以上が該当していること、また、「国民的自覚」も朝鮮人ではごく少数であるのに反し、日本人では転向動機の第2位にあがっていること、などである。

これらの相違点は互いに相関性を持つものだろう。すなわち、朝鮮人の転向は「拘禁」という外的な要因に強制された面が大きく、それと表裏一体の傾向として、「主義理論精算」や「国民的自覚」といった内発的な思想転換には乏しかったのである。そのことは、たとえば、一度転向しながら共産主義運動に復帰した「逆転向」者が、朝鮮人には相当数見られ、1930年から5年間で転向者全体の約1割に達したという事実にも窺われよう¹⁰⁾。

さて、このようにしてもたらされた転向について、当事者たる元共産主義者はどのような説明を与えていたのだろうか。

当然、強制によってもたらされた転向の後、沈黙を貫いた者もいる。しかし、一見奇妙なことに、転向が自発的意志に基づくことを強く主張した者も多く見出される。

満洲在住朝鮮人による朝鮮共産党再建運動の一環として、1930年朝鮮内に潜入し平壤で組織活動をした姜文秀が、33年に検挙され転向した後に述べているところでは、朝鮮人共産主義者の転向は、日本人の転向とは異なり、「社会的迫力に慥伏されたものではなく、従来血塗れの自己経験と客観的情勢との結論に逢着されたもの」だと自己分析している。同じ運動に呼応し、1930年ソウルの共青細胞組織に入会して検挙され、後に転向した黄舜鳳も、「朝鮮に於ける思想転向者は、権力の前の屈服者としてではなく、過去の永い政治運動の必然的運命としての転向であると見做されねばならぬ」「過去のあらゆる形態の革命的政治運動が朝鮮の民衆を救ひ得ないとすれば他の形の政治運動が求められねばならぬ」と主張している¹¹⁾。

また、1936年9月に結成され、朝鮮における全国的な転向者団体としては最初のものとなった大東民友会が結成時に発表した声明書には次の一節がある¹²⁾。

「吾人ノ過去ニ於ケル行動カ 単ナル好奇心ト名利慾ニ驅ラレタルニ依ッタモノテナカッタ同様 今次ノ吾等ノ転向ナルモノモ等シク利慾ノ衝動ヤ外力ノ強圧ニ依ッタノテナク 抑亦朝鮮民衆ニ対スル卑怯ナル裏切テハ更ニナク『朝鮮民衆ノ幸福ト発展』ヲ念願シテノ根本的立場ニハ古往今来一轍ニシテ渝ルトコロハナイ」(空白は原文のまま)。

このように朝鮮人転向者は、しばしば、転向が「権力の前の屈服」「外力ノ強圧」によるものではないとして自発性を強調し、その中核に朝鮮民衆の「救済」「幸福」「発展」などの主張を置いたのだった。

本来、「つねに自発性の側面と、被強制性の側面とをもっている」¹³⁾ 転向において、彼らがことさらに「自発性の側面」を強調したのはなぜか。もちろんそれが権力の前で語られた言葉だったことは忘れてはなるまい。しかしながら、上記のような朝鮮民衆の「幸福」の追求という弁が、転向者自身にとって全く実感を伴わないものだったとも思われない。

そもそもしばしば指摘されるように、朝鮮人にとって共産主義は民族解放理論として受容された¹⁴⁾。転向を誘導した第一線の担当者の報告の中にも、朝鮮人共産主義者を評して、「意識的たると否とに不拘其の根本に多分に民族的反感を抱蔵し共産主義革命に依り朝鮮民族の解放を期せんとする所謂民族的共産主義とも謂ふべく〔日本人共産主義者と〕根本的に相異なるものあり」、あるいは、「朝鮮の思想犯者は内地のその如く……観念的な義憤や情熱で動き出すとは異なり、其の実際活動の背後には常に何等かの生々しい民族的憂悶の実感を以て裏付けられて居る」などとする観察がしばしば見られる¹⁵⁾。

かかる「民族的共産主義」を元々抱懐していた彼らが、共産主義の放棄に当たり、朝鮮民衆の「救済」や「幸福」という言葉を用いて、内面の一貫性を保証しようとしたのである。朝鮮人転向者におけるこのような思想的統一性の強調は、裏面では、彼らの転向において内面的転換が乏しかったことと一脈通じているだろう。

しかし、他方で容易に想像されるように、具体的の中身を示しえない「幸福」という理由づけは、他者から見ると、転向者自身の自己弁護を超えるだけの説得力には乏しかった。

前述の大東民友会は、発足時約1万人の共産主義者に呼びかけたが、賛同を寄せたのは約500名に過ぎなかった¹⁶⁾。1920年代、朝鮮青年総同盟中央執行委員をつとめ光州学生運動を指導した経歴を持ちながら、満洲事変後に転向し大東民友会の理事に名をつらねた車載貞の場合、「嘗つて左翼の花形としてその熱烈な闘争心を謳はれた時のあの熱情をそのまゝ持ち続けて、プロレタリアと、朝鮮の民衆の為に盡すべきだと……心に深く誓った」ものの、「同志達より猛烈なる反対があった。大衆も支持するといふよりも不満を表明した。不純なる動機からだとさへ極言する者もゐたのである」¹⁷⁾。

以上に見たように、朝鮮人共産主義者において、転向は、権力の強制によってもたらされたという性格が強く、それと表裏一体の現象として内発的な思想転換の自覚を伴にくいものだった。その意味では、旧「民族的共産主義」者たちが朝鮮民族の「救済」「幸福」を旗印することで、自己の転向を一貫した思想の流れとして説明しようとしたことは、彼らの内面的論理からは必ずしも不自然なことではなかった。それが客観的には強弁であり自己弁護にすぎなかったことは、彼らの言説が共鳴より反発を受けたことに示されているが、しかし、自己弁護がその人の行動を拘束することもありうるだろう。ともあれ、このようにして、かつて共産主義運動に携わった朝鮮人が自己の転向に積極的意味を付与しようとしたことは、そこから、ある種の自発性を伴った転向運動が生まれる可能性を示すものだった。

2 姜永錫の転向

本稿で扱う2つの転向運動——日本国体学と東亜連盟運動——に関わった中心人物、姜永錫の足跡を判明した限りで辿りながら、前節で見た転向者の論理を読みとってみたい。

姜永錫は1906年5月全羅南道光州で生まれた¹⁸⁾。どのような家に育ち、いかなる幼年時代を送ったか定かでないが、後年の姜を知る者によれば、ロイド眼鏡をかけ頭の切れる美青年で、よい家柄の出であることを感じさせたという¹⁹⁾。

姜が成人した1920年代半ばは、朝鮮において社会主義が民族改良主義への批判を通じて台頭し、急速に影響力を強めていた時期だった。若き姜も生地光州で社会主義運動に携わっている。1925年から27年にかけて、光州青年会、光州青年同盟、全南青年連盟、新友会など、光州地域の多くの社会主義系青年運動団体に幹部として名をつらねており²⁰⁾、27年9月に検挙されたときは光州青年会委員長だった²¹⁾。

また、1926年11月、光州では、光州高等普通学校生ら16名を集め共産主義理論の学習を目的とする醒進会という学生秘密組織が結成されるが、この組織を計ったのは上記青年運動にも関わっていた姜永錫ほか数名の社会主義者だった²²⁾。醒進会は、毎月数回の会合を重ね、一時偽装解散しながらも1929年には会員30名を超えた。同会とその後身の読書会は、光州における社会主義者による学生の組織化の先駆けであり、その活動が1929年11月からの光州学生運動での両者の共闘に結びついていくことになる。姜永錫は、上記1927年の検挙でこうした動きからいったん離れたと思われるが、光州学生運動に際しては、社会主義者としてこの運動の指導に加わり、ソウルに赴いて当地の社会主義運動指導者と接触し主要学校に檄文を配布するなど、運動の拡大に一役買った²³⁾。

さらに、姜は、朝鮮共産党（1925年創立）のメンバーでもあった。入党時期は判らないが、第3次共産党（26年9月～28年2月）では党光州地域組織員となり、党傘下の高麗共産青年会では光州地域責任者をつとめている²⁴⁾。朝鮮共産党解体後、1931年に朝鮮総督府高等法院検事局が作成した「朝鮮共産党員身元調」なる党員176名のリストにも姜永錫の名が見える²⁵⁾。なお、第3次共産党で全羅南道地域責任者をつとめ、第4次党では中央検査候補委員となった姜錫奉は、姜永錫の兄という²⁶⁾。

これらの手がかりを総合すると、姜永錫は、1920年代社会主義に傾倒し、朝鮮共産党に参加するかたわら、地元光州で青年運動や学生の組織にも関わった現地活動家ということになるだろう。

さて、1929年12月末、姜は治安維持法違反で収監されている²⁷⁾。時期から見て光州学生運動への関与によるものと思われる。さらに出獄後、1933年10月にも青年6名とともに検挙・連行され、パンフレット類を多数押収されている。各地の旧共産党員と連携しながら、朝鮮共産党再建運動のための細胞組織を作っていたらしい²⁸⁾。

こうした相次ぐ弾圧によって共産主義者姜永錫は全く活動の場を失った。1935年から36年頃にかけて「共産主義運動の行詰りを、単に各自の卑怯ばかりではない事を感じ始めた」と、後に回顧している²⁹⁾。以後しばらく姜の足取りを辿ることはできないが、前記の検挙から日中戦争

期に転向運動家として再度登場するまでの間、姜は運動から手を引き沈黙を守らざるをえなくなっていたのだろう。

姜が転向した時期ははっきりしないが、日中戦争直前の時期とされる³⁰⁾。転向に当たり、姜はどのような論理を用意したのだろうか。1938年秋、姜は、自分の到達した心境を「国体覚認」という文章のなかで次のように説明している³¹⁾。

「全人類の究極の幸福、正義と繁栄を実現させる」思想とは何か。「他民族を駆逐する……民族利己主義」のドイツ・イタリアのファシズム、および「資本主義の物質的關係の上に発生し成長したる不正義ばかりを克服したる時代的な過程的な共産主義」は除外されねばならない。そして、「つら へ 内省するに大和民族の結成体こそ」「真の世界平和を建設する原動力」であり、その中心の「天皇は大和民族の^マ天皇であるばかりでなく、将来人類を救ひ導いて下さる可き世界の指導者」と考えた、と主張し、かかる日本国体を基盤とした「万邦協和」の根幹となるべきは、「日鮮両民族の一体的協和」である、と述べている。

ここに、共産主義の放棄、天皇制支持という、転向者の典型的思考様式を指摘することは易しい。しかし、このような思考が、単に治安当局からの圧力によって強制されたものと見られることを、姜は「私は政治的な意味に於て、日本の現実当局に喜ばれ度くはない。私の良心を傷つける恐れ^マあるからである」と述べ、拒む。姜の内面的契機は、過去20年近く「血みどろ」の共産主義運動を展開してきた運動指導者の現状について、次のように語っているところに窺える。

「而てその後の指導者階級は完全にその活動を中止し、全く私生活ばかりに止り、民族の将来は意識的に考える事を避けた。勿論これは彼等だけの責任ではない。過去の日本の政治情勢にも十分これを認める。とは云へ『朝鮮民族は滅亡のどん底に落ちつゝある。それを救ふものは共産主義運動だけだ』といひ乍ら何故救はうとしないだらうか、その答に『時期が不利だ』といふが一体時期は何時来るものであるか。若し時機到来するに先き立って滅亡に終るならば問題ではない。いったい彼の大衆にその実現を待つだけの生活的余裕が十分あるとでもいふのか。これ機会主義者の詭弁であり無力者の弁解でしかない。一步譲って左様なりとして、現実^マに苦しんでゐるのを見れば可能な範囲に於ての活動がある可き筈だ」。

過去に共産主義運動に携わった者たちが沈黙を守っていることを「機会主義者の詭弁」と難じ、「可能な範囲に於ての活動」を呼びかけているのである。これはかつての共産主義運動指導者を糾弾する形を取りながらも、元共産主義運動の闘士だった我が身を振り返っての弁でもあることは明かだろう。

もとより、それが自己弁護に堕していないとはいいいきれない。しかし、姜永錫が、共産主義運動が閉息させられた状況下、なお主観的には朝鮮民族の現状に対する危機意識を持ち、活動の意志を生かす場を求めようとしていたことも一面の事実だろう。そしてそれは、内面の自発

性を強調することで、現状の改革者としての自己の存在理由を確認しようとした朝鮮人転向者の一典型を示すものだった。

Ⅱ 日本国体学

1 里見岸雄の日本国体学とその朝鮮論

共産主義を放棄した姜永錫が、「可能な範囲に於ての活動」の場を提供してくれると考えていたのは、里見岸雄の日本国体学だった。里見は1897年に生まれた国家主義者。石原莞爾・井上日召などの国家主義者に思想的影響を与えた日蓮主義教団国柱会の創始者田中智学は、里見の父に当たる。里見は、1924年に里見日本文化研究所（後、里見日本文化学研究所と改称）を創立し、27年以来「国体科学」を提唱した。1936年田中智学を顧問として日本国体学会を結成したが、同年末の学会会員数は140名ほどだった。また、美濃部達吉の憲法機関説に対する攻撃にも加わっている。

昭和期の国家主義者としては、里見はかなり朝鮮を視野に入れていた。朝鮮へは既に1926年に講演旅行（里見は「鮮満巡講」と呼んでいる）で訪れていたが、朝鮮行が頻繁になったのは、35年9月の第4次「鮮満巡講」からである。同年朝鮮総督府警務局保安課長に就任した日蓮教徒上内彦策の要請により、以後、朝鮮総督府嘱託という資格で巡講することになったことによる³²⁾。翌年朝鮮総督に就任した南次郎が「五大政綱」の第一に「国体明徴」を掲げたこともその活動を後押しした。以後、里見は1939年まで年に1、2回の割合で朝鮮を訪れ、警察関係を中心とした官公署、公立学校などで講演活動を行った。

また、このような活動の中で、里見自身、朝鮮問題を意識し一定の朝鮮論を形成するにいたった。里見日本文化学研究所機関誌『社会と国体』第157号（1935年12月）に「内鮮融和の基礎問題」を、同誌第161号（36年3月）には「朝鮮の同胞と日本国体」を、いずれも巻頭論文として掲載している。特に後者は上内からの意見提出の求めに応じ総督府警務局から資料提供を受けて書かれたものであり、小冊子としても刊行された³³⁾。

「朝鮮の同胞と日本国体」（以下、『社会と国体』に掲載されたものから引用）の論旨は次のようなものである。過去の朝鮮独立運動は民族主義運動・社会主義運動などに分類されるが、現実性のない独立運動は、「全く日本帝国の為め、延いては朝鮮民族の為め不幸であるから、これは能ふ限り沈静せしめ消滅せしめなければならぬ」（21頁）。「朝鮮民族としての対抗意識が消滅し、天皇の御子として臣民としての純粋なる自覚に徹底してしまへば、そこには、最早や、民族的障害といふものは取除かれ、全く忠良純粋の日本臣民たるの事実のみが輝き亘り、「同権同義務」は「求めなくても自然に得られる」のである（22～23頁）。また、「内地人の使

命」に触れて、「既に我が版図となれる地の新同胞を、建国の理想、皇道精神に則って心から一字と為し同胞と為し得ない様な卑劣な征服者根性で、どうして皇運を扶翼し得よう」とも述べる（31頁）。

かつて里見は、100版を越える売れ行きを示した著書『天皇とプロレタリア』（アルス社、1929年）において、「国体と資本主義制度の同一ならざることを指摘し……天皇はプロレタリアの敵でない」とし、「四民平等一君万民挙国一体共存共栄の道こそ日本国体」と論じた³⁴⁾が、それと同様に、一君万民主義のもと朝鮮民族が「天皇の御子」に同化することで「同権同義務」が付与されるとの論理を説いたのだった³⁵⁾。それは、「皇道精神」や「八紘一字」という言葉で装飾されてはいるにしても、実は、総督府の説いた「内鮮一体」論と基本的に変わらない。しかし注目したいのは、そのような論理構造であるが故に、朝鮮人知識人が内鮮一体論に「差別からの脱出」の論理を見いだそうとした³⁶⁾のと似通った受け止め方をされたことである。

たとえば、韓末開化派の指導者金玉均を顕彰する古筠会で常務理事をつとめていた金振九もそのような一人である。金は、その著書の中で「今日の日本人は、他民族を、殊に大陸民族を包容するだけの雅量もなければ、和合するだけの能力もありませぬ」とし、中国人・朝鮮人に対する差別意識を「日本民族性の大なる缺点」と断じながら、里見の小冊子『朝鮮の同胞と日本国体』に言及して「私の持論と相合致することには、最大の快味を感じ」たと述べる³⁷⁾。

あるいは、1938年夏、里見の主催する国体科学夏期講習会に参加した金鎮勇は、「忌憚なく告白すれば朝鮮統治政策は未だ完全なものではない。此際此の神聖なる科学的国体主義をスローガン高く掲げて一視同仁、八紘一字の皇道を建設し実行し一億萬民が共に喜び共に憂ふの共存共栄の体系化を実現したい」との感想を残している³⁸⁾。

また、1939年、全羅南道内務部長金大羽から、創氏改名についての意見を求められた里見は「朝鮮人の姓を権力で日本流に変更させることなど全く日本国体と無関係だと力説」したといい、金から「先生のおっしゃるような国体明徴なら私達朝鮮人もついてゆけると思ふ」との言葉を引きだしたという³⁹⁾。

このように、朝鮮人が里見の理論に「共鳴」したのは、総じて、民族独立運動の「消滅」や「臣民」としての自覚の徹底などの論点よりも、「皇道精神に則って心から一字と為し同胞と為し得ない様な卑劣な征服者根性」をもった日本人への批判であったことが判るだろう。里見の日本国体学は、そのような朝鮮人の不満を吸収しつつ、「日本国体」への朝鮮人の統合を期したのである。

2 転向者姜永錫と里見岸雄

姜永錫が初めて里見岸雄と接触したのは、1938年6月、里見が第7次「鮮満巡講」で朝鮮を訪れた折のことのようである（これに先立ち、1937年5月の第6次巡講で出会っていたとする

証言もあるが、確認できない)⁴⁰⁾。

後に姜の同志となる金龍済によれば、里見との会見以前に、姜は郷地光州で里見門下の日蓮教徒藤田玄太郎（日本国体学会、国柱会に所属）⁴¹⁾と知りあっており、その勧めで里見の著書を読み、「里見の民族問題・朝鮮問題の学説は……あらまし知っていた」とされている。姜は、藤田の紹介により大田で里見の講演を聴き、清州への移動の道中にも同行し「いろいろな問題を論じあった」。「深く質問した重点は、日本で『皇道』といわれる本質が、東洋儒教の『王道』思想で、そのヒーマニズムが実践政治の本道だ」と里見が強調する論点だった。姜は「これに共鳴しなかったが、実際の日本政治があまりにも、帝国主義なのが疑問」で「すっかり共鳴するには至らなかった」という⁴²⁾。前節で見たいく人かの朝鮮人同様、姜も里見の言説に、現実の朝鮮支配のもつ「帝国主義」的性格への批判を期待したものと見える。以後、約1年間、姜は積極的に里見の活動に関わった。

同年8月、姜は、東京で開かれた里見主催の国体科学夏期講習会に参加する。参加者30名の内、朝鮮人は姜と先述の金鎮勇であり、日本人参加者からは「今年の講習会には半島出身の方が二名も参加され日々其熱心なる求学の様には敬服してゐる」との感想も出ている⁴³⁾。その一方で、講習2日目（8月4日）には、「姜さんから朝鮮民族の諸問題が提起され、それを中心に国体主義的批判が縦横に聞はされ」、その翌々日にも議論があったとされる⁴⁴⁾。内容は明らかでないが、日本人参加者と意見の不一致もあったのかもしれない。

さらに、同年9月末から約1週間、里見は、朝鮮防共協会全羅南道連合支部の招聘により全羅南道各地で講演を行ったが、招聘の中心となったのは、姜永錫、藤田玄太郎、そして全羅南道警察部高等警察課警部中島命門だった⁴⁵⁾。姜、藤田、中島の3人は、防共協会麗水、木浦、羅州各支部での里見の講演にも随行している。麗水支部主催で聴衆800名を集めた、「内鮮一体と日本国体」との講演は、姜永錫の要約するところでは、「建国より八紘一字の理想を持」つ日本による「道義的世界秩序」建設の第一歩として「内鮮一体」を位置づけ、あわせて「内地人は在来の反国体的思想行為を打破」すべきことを説いたものだった。

また、朝鮮防共協会招聘の同巡講では、姜自身率先して転向者の教化を試みた。姜の主催で、光州の藤田宅（料亭）に里見を招き、中島警部も交えて、「もと共產主義を奉じ四五年の刑を受けし人々ばかり」14,5名を集めた「光州青年指導者座談会」を開いている⁴⁶⁾。激論が交わされたらしく、里見は、深夜「へとへになって宿にかへ」ったと日記に記している。

翌1939年1月には、姜と藤田は、里見の理論に基づく「東亜協和理念研究所設立委員会」を光州で結成している。中島命門も支援したという（「金龍済回顧」C, 68頁）。『国体学雑誌』第202号（1939年3月）に掲載された趣意書によれば、「八紘一字の理想を抱く日本」による「東亜建設遂行は日鮮両民族の一体的協和がその根幹をなすものでなくてはならぬ」として、そのための「明哲な実践理論を確立する事」を目的とした、としている。同委員会において、

姜は「自ら学的研究の中心となることを避け、内鮮の適当なる学徒を聘してこれに従事せしめ」、自らは「専ら研究所の維持に当らんとする意図を有して」いた⁴⁷⁾が、同委員会は結局「読書室程度」（「金龍濟回顧」C，68頁）のものにとどまったようである。

社会運動から身を遠ざけることを「機会主義者の詭弁」と難じ、「可能な範囲に於ての活動」を求めてやまなかった姜永錫は、以上のような活動が朝鮮民族の「幸福」に合致することを強調した。前記東亜協和理念研究所設立委員会の三綱領の第二は、「本研究所は国体を研究しその建国の理想に基き朝鮮民族の幸福なる生活体系の理論確立を目的とす」とうたっている⁴⁸⁾。

しかし、こうした行動は結局のところ現に行われている皇民化政策に迎合するものであったことは疑えない。姜は、里見に対し「先生のおっしゃるような日本国体であり、日本天皇であるなら、私共は朝鮮の独立運動なんかやらなくてもよい」と語っていたともいう⁴⁹⁾。かかる言動は、同胞から背信として非難を浴びた。里見門下の原田政盛は1939年3月、ソウルで姜の訪問を受けたときのことを次のように記している⁵⁰⁾。

「二人、深夜まで話し合った。彼〔姜永錫〕も、朝鮮の中で日本国体を叫び日本天皇を云々する事は、かつての共産党や独立運動の同志の人々からは裏切者と非難されていると、その苦境にある事を聞かされた。しかし、彼は言った。『私はどんなに非難されようと、日本国体を信じています。朝鮮の真の幸福はこれ以外にないと思っています』と」。

その一方で、姜永錫の倒錯した民族意識の波紋は、次第に、一部の元独立運動家へも広がりつつあった。1939年6月、里見は第8次「鮮満巡講」を行う。姜永錫、藤田玄太郎、中島命門など先来の同調者、協力者も何度か来訪しているが、注目されるのは、姜以外にも独立運動の経歴を有する者が里見に接触を求めたことである⁵¹⁾。6月8日、姜の紹介で、朴熙道が里見と面会しており、翌日も里見と同行している。11日には、朴熙道が社長をつとめる東洋之光社で、里見を招いて座談会が開かれた。朝鮮人の側から自発的に里見を呼んだことは間違いなく、里見日記には「あまりに押しつけがましくて不愉快であったが、姜君に今後を誠めて出席」した、とある。この座談会には、他に朝鮮軍関係者、京城帝国大学教授、そして張徳秀（東洋之光社理事）、申興雨（同前）、李東珪らが出席している。張徳秀は翌日からの日本国体学講座にも参加しており、里見は、『国体学雑誌』に掲載した紀行文に、「殊に張徳秀氏の如き人が、これによって日本国体に関する認識を幾分でも深められた事はいろいろな意味で喜んでよい」との感想を記している。

これら新たに里見の面識を得た朝鮮人は、既に独立運動の場を失っていた民族主義運動経験者だった。かつて3・1独立運動において独立宣言書に署名したキリスト教系民族主義者朴熙道は、1922年雑誌『新生活』を発刊し朝鮮における社会主義伝播の有力な媒体を提供したが、翌年発行禁止に追いこまれた。1927年に結成された新幹会にも参加するが、20年代末から、尹致昊らとともに信友会を結成し合法的自治運動を目指す方向に転換していた。また、張徳秀は、

『東亜日報』グループないし民族主義右派の中心として1920年代初め青年運動や物産奨励運動などを指導したが、23年から10年余り英米に留学し、帰国後37年には主宰していた青丘倶楽部を解散させられ「親日」を誓わされていた。

もっとも、これらの人物は、そのまま里見に付き従って活動したわけではなかった。里見が、1939年内閣興亜院の諮問機関たる興亜委員会の常任幹事に任じられたのを機に、「鮮満巡講」には第8次をもって終止符を打ったためである。姜永錫の活動の様子も、以後、里見日本文化学研究所機関誌『国体学雑誌』の誌上には掲載されておらず、里見から離れたもののようである⁵²⁾。彼らは、この時、石原莞爾を指導者とする東亜連盟運動に足場を移しつつあった。

Ⅲ 東亜連盟運動

1 朝鮮への東亜連盟論の波及

前章に見た朝鮮人転向者、民族主義運動経験者は、里見との接触のかたわら、東亜連盟運動を知り、やがてこの運動を朝鮮で組織化することに活動の重点を移していく。

東亜連盟運動は、満洲事変を主導した石原莞爾を理論的指導者として、日中戦争期以降、本格化した社会運動である。満洲国の統治理念たる「民族協和」や「王道」原理を日中関係に適用し、「政治の独立」「国防の共同」「経済の一体化」などを条件として、日本側の一定の譲歩のもと日中間の戦争の停止、連盟関係の形成を企図したこの運動は、1939年に結成された東亜連盟協会（後、東亜連盟同志会と改称）を担い手とし、日本各地および中国大陆などに支部を設けた。内務省警保局編『社会運動ノ状況』各年版によれば、日本国内のみで会員1万名を超えた。

東亜連盟論は、また、朝鮮における内鮮一体化政策を批判し朝鮮「自治」論を唱えたりするなど、独自の朝鮮論を提起した。もっとも、それは、内鮮一体化政策の強圧的・急進的な進め方に是正を求めたものの、政策の原理たる同化主義に対して根底的な批判を突きつけるのではなく、「自治」論も朝鮮独立を容認してはいなかった⁵³⁾。しかし、こうした限界を抱えながらも朝鮮統治の現状に批判を向け、日中戦争期、日本を中心とする運動としては恐らく最も活発に朝鮮問題を取りあげたこの運動に対して、一部朝鮮人は関心を向けようとしていた。

当時、代表的な内鮮一体論者として知られた玄永燮は、1940年、朝鮮思想界に東亜連盟論が台頭してきたことに注意を向け、「朝鮮の知識階級中にはこの東亜連盟に賛成し努力する者もいる模様だ」と述べている⁵⁴⁾。ただし、玄は、「筆者のような急進的内鮮一体論は彼らの批判の対象となることだけは想像がつく」として立場の違いを明らかにすることの方に力点を置いている。「差別からの脱出」のために朝鮮固有の文物・精神一切の精算を主張していた玄のよ

うな人間にとっては、「民族が存在する間はその民族感情を十分尊重せねばならぬ……言語風俗等を政治の威力によって急速に変革せんとするが如きは、厳に慎まねばならぬ」⁵⁵⁾との東亜連盟論の主張は受け入れられなかったのである。

また、玄とともに緑旗連盟などで活動した李泳根も、1942年、東亜連盟論の影響力を認めつつ、それを批判している⁵⁶⁾。東亜連盟論が「朝鮮に於ける民族主義者を強く刺戟し」「一部の連中は志士然として節を曲げないとかで民族独立理念を民族協和乃至民族自治に置換へて考へてゐる」。李の理解では、東亜連盟運動とは、「朝鮮人を一民族のルートとして認め、かつ朝鮮をも、東亜連盟の一構成単位として見やうとする理論」に基づき、総督府の方針を「恐ろしく悪いもの」と宣伝する運動だった。そしてかかる運動は、「朝鮮を併合以前の状態に帰さうとする」「革命運動」であり、「実際にはないことを観念化してこれをいかにも真理の如く信じてしまつてゐる」知識人の夢想だと糾弾している。

このような内鮮一体論者からの批判は、自ずと、一部朝鮮人知識人が東亜連盟運動に見いだした魅力、あるいは見いだそうとした期待を明らかにしている。朝鮮人の東亜連盟論者にとっては、東亜連盟論は朝鮮人の民族性の存続を認め、統治政策批判の立脚点を与えてくれるものと映っていたのである。さらに、本来朝鮮の分離を容認する枠組みを持たない思想であっても、連盟を形成する国家の「政治の独立」をうたい朝鮮「自治」論を公然と掲げた東亜連盟論に、朝鮮人の側で民族独立という期待を仮託することもありえないことではなかった。こうした点に対し朝鮮総督府は、「民族主義者等一部ノ者ニ在リテハ……民族協和主義ヲ主張スル東亜連盟運動ニ対シ異常ナル関心ヲ払ヒ本運動ニ便乗シテ朝鮮ノ自治独立ノ実現ヲ夢想」していると見て、はっきりと危惧を示していた⁵⁷⁾。

姜永錫らが東亜連盟運動に関わったのは、このように同運動が朝鮮において一部朝鮮人知識人の関心を引きつけ、やがては総督府や内鮮一体論者からの警戒と批判を招こうとしていたときだった。

2 姜永錫による運動の組織化

姜永錫が、朝鮮で東亜連盟運動の組織を結成することを考えたのは、日本で石原と会見したことに端を発する。石原と親交を結び、東亜連盟運動のイデオログの役割も果たした里見岸雄の紹介を介したものであったようである⁵⁸⁾。

姜と石原が出会った時期は確定しがたいが、姜とともにこの運動に関わることになる金龍済の回顧では、姜と会見した当時、石原は舞鶴要塞司令官に赴任した（1938年12月）直後であり、会見後朝鮮に帰国した姜は『東洋之光』誌の創刊（39年1月）を眼にしたとされている（「金龍済回顧」C, 1, 13頁）。姜が東亜連盟運動を知ったのは、恐らく1938年末だろう。

金の回顧には前後関係に矛盾もある⁵⁹⁾が、原田政盛の回顧は、上記の推定を裏付ける⁶⁰⁾。原

田は、1939年3月、ソウル滞在中、姜永錫・文彰会⁶¹⁾とともに、上内彦策（当時東洋拓殖株式会社理事）の邸宅で会合したが、その折、上内から『『ここは東拓の理事公邸だから、余り東亜連盟だとか朝鮮総督府の批判等といった話は困るな』と、なかば真剣な、なかば冗談風に言われた』という。原田が、ソウル・釜山で朝鮮の同志と会った際「いずれでも、東亜連盟結成の必要が力説された」とも回顧していることを考えあわせると、姜永錫も、このときまでには東亜連盟運動を知っていたと見てほぼ間違いない。

ところで、先にあげた金龍済の回顧は、既に指摘されているように、「当事者のみが知りうるディテイル」を豊富に含む反面、「基本的なところで事実認識にブレがある」⁶²⁾。それは、姜との最初の会見で、石原が次のように述べたとされているところにまず現れている（「金龍済回顧」C、2～4頁）。

「あなた〔姜永錫〕が心配する朝鮮は、日本の支配から独立するのが当然です。完全な民族自主の独立ですね。……現実問題として、日本が東亜問題、とくに支那問題を解決するには、いやでもおうでも、朝鮮の独立が先行されなければならない。日本が侵略をほしいままにした証拠を、朝鮮の独立でみせないと、支那や東亜の諸民族は、信用できない日本とは、協和しないで抗争するにきまっています」。

これをはじめとして、金龍済は3種類の回想記のいずれにおいても、朝鮮における東亜連盟運動が「偽装親日派の独立運動」だったと主張することに最大の力点を置いている。

しかし、石原が他の朝鮮人東亜連盟運動員に対して語っているところは、金の回顧を否定する。満洲帝国協和会中央本部に所属し東亜連盟論に共鳴していた金昌南は、1940年12月、「日鮮両民族ノ協和国」を提唱する書簡を石原に送ったが、石原はこれを一種の朝鮮独立論と受け止め、強く批判した。「今日は既に一民族一国家の主義にとらはるゝことなく、『なし得る限り広い範囲が一国家となる』ことが希望せらるべきこと」であり、「折角三十年来合一した朝鮮が日本より分離するは、理論上自然の大道とは申されませぬ」、また、明治天皇の「御聖断」による「日韓合邦」は「帝国主義的思召とは夢にも考へ得ない」等と、石原の返書は記している⁶³⁾。

また、1939年以来石原に傾倒し、京都で朝鮮人留学生を組織し東亜連盟運動を進め、後に姜永錫とも接触することになる曹寧柱は、朝鮮「自治」論は「日本の出し惜しみ」ではないか、との疑問をぶつけた際、石原から次のような答えが返ってきたとしている⁶⁴⁾。

「東亜連盟の諸国家は、政治の独立であるが、連盟の構想する全体方針には従わなければならない。制約の義務だ。連盟間の交流が進むにつれて、お互いの独立の個性も薄くなり、東亜連盟—東亜連邦—東亜大同国へとコースをたどる。これまでは日鮮関係には、幾多の不幸もあったが、いろいろと交流もおこなわれ、経済もそれなりに一体化している。折角ここまで来たのだ、あとずさりする必要はない」。

これから明らかなように、石原は、既に併合後30年を経た朝鮮支配を動かしがたいものと見なし、それを「東亜連盟」結成にいたる一階梯として積極的に位置づけさえした。「民族協和」をうたい諸民族の結合を唱える東亜連盟運動の論理は、朝鮮の分離・独立を受け入れる枠組みを持たなかったのである。石原が姜永錫に対し、運動の原理に抵触する「朝鮮独立」を軽々しく語ったことはまずありえないと思われる⁶⁵⁾。

さて、姜永錫が朝鮮帰国後に進めた運動参加者の組織は、以下のように進行したという。

姜の帰国時点で既に、藤田玄太郎、中島命門が東亜連盟運動の同志となっていた。彼らの間で下相談を始めた矢先、雑誌『東洋之光』発刊を知った（「金龍濟回顧」C, 12～13頁）。姜は、東洋之光社社長朴熙道と交友関係にあった李恒堯⁶⁶⁾を仲介として、藤田とともに朴に面会し、運動参加を承諾させた（同前, 13～21頁）。さらに、朴熙道の発議で、民族主義右派の巨頭張徳秀を3ヶ月かけ説得し、参加の意志を確認した（同前, 22, 26頁）。これ以降、東洋之光社関係者を中心に陣営は急速に整い、正式メンバー8名により、朴熙道を代表とする「朝鮮東亜連盟本部」⁶⁷⁾（以下、朝東連とする）が結成された。1939年中のことだという（「金龍濟回顧」B, 134頁）。ただし、朝鮮では、東亜連盟運動は総督府によって事実上禁止されていたため（後述）、朝東連は非合法組織であり、東亜連盟協会からは支部として認可されておらず、恐らくはその存在すらほとんど知られていなかった⁶⁸⁾。

こうした動きの舞台となった東洋之光社は、元キリスト教系民族主義者の朴熙道を社長とし、共産主義からの転向者を実務陣とした出版社である。1939年1月に日本語月刊雑誌『東洋之光』を創刊し、論説や時局座談会を通じて皇民化政策を積極的に後押しした。金龍濟回顧に従うと、そうした対日協力の裏で東亜連盟運動に携わった人士は表2のようになる。正確な参加者を示している保証は得がたいが⁶⁹⁾、一応大枠を示していると考えられる。

これら運動参加者は3つのグループに大別できる。

第一は、朴熙道、張徳秀、羅景錫の旧民族主義右派である。朴熙道は、前述のように1920年代末から自治論に傾き、また、張徳秀らの拠った『東亜日報』は民族紙としての性格の反面、日本を近代文明の象徴とみなす志向をもった⁷⁰⁾。政治的圧力による皇民化政策に非を鳴らしつつ、日本との一体化という枠内で朝鮮「自治」を説く東亜連盟論に彼らが共感した素地には、そのような日本の朝鮮植民地支配を拒否しきれない従来からの発想があったのではないか。

この系列に属する者としては、正式メンバー以外にも、『東亜日報』社長で同紙廃刊の口実を与えかねないとして運動参加を拒んだ宋鎮禹（「金龍濟回顧」C, 42～45頁）、東亜日報社を創立した兄金性洙とともに湖南財閥を築き、東亜連盟運動には資金援助をしたという金季洙（同前, 44頁）らがいる⁷¹⁾。なお、朴熙道、張徳秀は、朝東連「代表」、「副代表」という地位にあったものの、いずれも会合場所や資金の提供など側面的な援助にとどまり、運動の実務にはあまり関与していなかったようである⁷²⁾。また、東亜連盟論に共鳴しつつも、その思想内容

表2 「朝鮮東亜連盟本部」の正式盟員

姓名	主な運動歴	東洋之光社内での 地位、職業	盟員としての 役割分担	石原莞爾・曹寧柱 との接触
朴 熙 道	1919年3・1運動「民族代表」 1922～23年『新生活』主宰	東洋之光社社長，同理事	代表	39.11.11, 44.3頃
張 徳 秀	1920年ソウル青年会結成， 東亜日報社主幹（後副社長）	東洋之光社理事， 東亜日報取締役，普成専門学 校教授	副代表	44.3頃
羅 景 錫	1922年頃朝鮮労働共済会理事 1929年『東亜日報』奉天支局長	東洋之光社理事	財政責任者	
姜 永 錫	1920年代青年運動に参加 第3次朝鮮共産党光州地区組織員	東洋之光社経理部長	組織責任者	39.11.7, 40.6.2, 40.7.31, 40.6頃， 41.9頃
金 龍 済	1927年渡日し，日本プロレタリア作家 同盟，日本プロレタリア連盟等に参加	東洋之光社事業部長，後に編 輯部長	幹事	
俞 鎮 熙	1925年朝鮮共産党創立に参加，同中央 執行委員。『新生活』編輯陣に加わる	医師	盟員	
藤田玄太郎		光州で料亭経営	連絡責任者	39.9.30, 40.8頃
中 島 命 門		朝鮮総督府警務局図書課属	情報責任者	

出典：「金龍済回顧」A，266頁（同B，158～159頁，の記述も同内容）。「東洋之光社内での地位，職業」欄については，森田芳夫「朝鮮思想諸陣営」（『東洋之光』第1巻第12号，1940年1月）55～56頁，林鍾国『親日文学論』（邦訳，高麗書林，1976年）37～38頁も参照した。「石原莞爾・曹寧柱との接触」欄は，石原莞爾「日記」（角田順編『石原莞爾資料 — 国防論策篇 —』原書房，1971年，所収），内務省警保局編刊『昭和十七年中ニ於ケル社会運動ノ状況』830頁，曹寧柱氏の筆者に対する談話（1996年2月21日）によって確認しえたものをあげている。

注1：「東洋之光社内での地位，職業」欄は，原則として1940年時点のものをあげている。

2：「石原莞爾・曹寧柱との接触」欄は，東亜連盟運動の指導者石原やその側近だった曹との面会の年月（日）をあげている。下線を引いたものが石原との面会年月日，引いていないものが曹との面会年月である。

を深く理解してはいなかったともいう⁷³⁾。

第二は，元朝鮮共産党員の姜永錫，俞鎮熙あるいはかつてのプロレタリア詩人金龍済等，共産主義運動に携わった経験を持ち1930年代に転向した者たちである。これら転向者の参加は，日本においても，マルクス主義の洗礼を受けた少なからぬ知識人・農民運動経験者が，活動の場を失った中で，東亜連盟運動が不徹底ながら示した帝国主義批判論にひかれ運動に参加したという事実を想起させる⁷⁴⁾。『東洋之光』誌に載った論説「転向者の新しき進路」（筆者朴熙道となっているが実際の執筆者は金龍済と思われる）には，転向者のとるべき態度について，「彼等が思想人である限り，過去に於いて，社会人類のために身を賭して闘った如く，その時

代の確信と情熱を以て、新しい日本精神の下に民衆運動の先端に立って指導しなければならない」とのくだりがある⁷⁵⁾。姜永錫、金龍済らはこのような、あるべき転向者像に自己の姿を重ね合わせていたのだろう。

彼らは朝東連の実際の運動において中心的役割を果たした。「姜永錫は、機関誌『東亜連盟』の秘密配布や、学生層の組織、指導活動はすべて彼が担当して、代表者の朴熙道にも具体的な報告はしない鉄則が守られていた」（「金龍済回顧」B, 178頁）。運動の実態については次節で検討することとし、ここでは活動を支えた彼らの主張を検討したい。

姜永錫は、1939年7月から『東洋之光』に「皇道朝鮮」という長大な論文の連載を始めている。そこでは、姜は、「我が天皇政治」の「この主義〔八紘一字〕は全世界を一家とし、各民族国家は、その如何なるを論ぜず平等な立場に於て相互尊重し、抱容協和して一体的人類の総合文化に寄与し得る人格的結合を意欲するものであって、決して民族間に上下とか差別とか優劣とかを設けない」と主張し、「朝鮮の解決と幸福はこの主義に結合して世界的にその実現を遂行する中に解決される」と論じている⁷⁶⁾。

金龍済の回想記は、朝東連参加者の親日的行為は表面的な「偽装親日」に過ぎぬとするが、姜永錫の上記見解を単なる「偽装」と見ることはできまい。そもそも、朝東連参加者は、里見の日本国体学に接触した者が大半を占める。1939年初頭から同年半ばにかけ、姜永錫、朴熙道、張徳秀あるいは藤田玄太郎、中島命門は里見の「鮮満巡講」に関わりながら、同時に東亜連盟運動を組織しつつあったはずであり、2つの運動は一時期重なり合って進められた可能性が高い。そのことは、両運動に必ずしも思想的な断絶がなかったことを推測させる。実際、姜永錫が上記「皇道朝鮮」において説く、日本天皇による朝鮮支配のもとで民族の「上下とか差別とか優劣」を解消しようとする発想は、里見門下時代からのものだった。

また、姜永錫が1938年秋に執筆し、「日鮮両民族の一体的協和」を説いた「国体覚認」という論説（第I章第2節参照）は、藤田玄太郎によって『王道文化』1940年7月号に紹介、掲載されたものである（「国体覚認」冒頭の藤田注記による）。『東洋之光』のような御用雑誌でなく、東亜連盟運動の準機関誌というべき『王道文化』⁷⁷⁾に、朝鮮独立を否認する文章を以前のまま掲載したことは、姜永錫が東亜連盟運動に関わってからも大きな意識の変化を経ていなかったことを示している⁷⁸⁾。

さて、朝東連に参加した第三のグループは、日本人藤田玄太郎、中島命門である。彼らが日蓮教徒だったことは（「金龍済回顧」A, 268頁）、運動参加に宗教的・思想的背景があったことを窺わせる（石原莞爾は日蓮主義系団体国柱会の信行員であり、また『王道文化』誌も本来国柱会青年部の精華会の機関誌である）。藤田の場合、日本で石原や東亜連盟運動関係者と会談しており、実際に朝東連「連絡責任者」らしき役割をつとめている⁷⁹⁾。

しかし、少なくとも、彼らが、「金龍済回顧」C, 99頁のいうように、「朝鮮の独立運動を理

解—共鳴」していたとは思われない。藤田は、『王道文化』誌上にいくつかの朝鮮論を書いているが、その議論は、たとえば、「本質的には民族協和の主導者は日本であり、現実的にはそうでなかった日本の二重性が、強く究明され反省されねばならない」としながら、「内鮮が一体になることは……天業連邦としての東亜連盟結成の良き協同責任者たらしめることである」とし、「日韓合邦を、来るべき人類後史に先駆けした民族行為」と評価するものだった⁸⁰⁾。藤田が朝鮮民族の問題に強い関心を抱いた人物だったことは事実のようだ⁸¹⁾が、その関心のあり方は、朝鮮統治の現状に批判を示しながらも「内鮮一体」を東亜連盟論の一環として是認し、その枠内での日本人と朝鮮人の平等を説いたという程度のものだった。それは、石原の姿勢と同様のものであり、朝鮮独立の否認という本質においては里見岸雄の朝鮮論から大きく飛躍したものでなかった。なお、藤田は、皇民化政策に加担した日蓮主義系団体緑旗連盟にも加わっている⁸²⁾。

また、日本人参加者の一人に、現役の総督府警察官中島命門が名を加えていることは奇異な感を与えるが、その参加理由は詳かでない。中島は、1920年代より全羅南道各地の警察署に勤務し、30年代初め以降は主に全羅南道警察部高等警察課で勤め、前述のように、里見の活動を姜、藤田とともに支援した。ソウルで朝東連が結成されたのとはほぼ同じ1939年頃、警務局図書課に配属替えとなっている。中島は、金龍済に対し「金さんは総督文学賞をもらうほど親日文学をやったが〔1943年4月、国語文芸総督賞を授与された〕、それでも当局ではまだうたがっています。この際、いっそう活発な作品活動をしなさい。あなたにはそれがいちばんよい保身策ですよ」と述べたというが（「金龍済回顧」B, 176頁）、金はこれを朝東連同志としての情報提供と受け止めている。中島は1943年、咸鏡南道警察部経済警察課長となったことで、朝東連の運動から離れたという。

3 運動の実態

姜永錫ら転向者を実務の中心に置いた朝東連は、機関誌配布や学生層を中心とした指導を企図していたようである。しかし、現実にはこれらの活動はほとんど実を結んでいない。

機関誌の配布については、『東亜連盟』1940年6月号に、近況として、「『東亜連盟』朝鮮取扱所」が京城府明治町2丁目88番地に新設されたことが伝えられている⁸³⁾が、これは東洋之光社の住所に他ならない。しかし、総督府の取締方針（後述）のもと機関誌類の普及は困難だった。東亜連盟協会会長だった木村武雄によると、「朝鮮では連盟主義者のほとんどが『赤だ』ときめつけられ、〔東亜連盟〕協会出版の本をもっているというだけで検挙された」という⁸⁴⁾。実際、1942年東亜連盟協会を訪れた一朝鮮人は「朝鮮に於ては東亜連盟関係書は入手困難」と述べている⁸⁵⁾。1943年秋には、平安北道新義州で朝鮮人青年朴在圭が『東亜連盟』誌をもっていただけで警察署に連行され、半年間拘留されている⁸⁶⁾。

こうしたことは朝鮮内に東亜連盟運動の潜在的支持者が根強く存在したことを示唆している。司法当局は、1941年には「東亜連盟理論ニ便乗シ合法ノ仮面ニ隠レテ朝鮮ノ独立ヲ企図セントスルカ如キ運動ノ萌芽ヲ見相当数ノ共鳴者ヲ獲得シツツアリ」としており、また43年にも「最近の民族主義運動の特質は所謂東亜連盟理論の影響を受くこと甚大なる点にして殊に一部上層階級中には^{ママ}皇道大共栄圏確立の暁に於て……朝鮮民族の独立も亦必至なりと倣」ず者が少なくないことを指摘している⁸⁷⁾。

しかしながら、それは朝東連の活動と直接関わるものではない。朝東連では運動員の獲得による組織拡大は、「人が多いと秘密のばれる危険率が多いから」（「金龍濟回顧」B，159頁）という理由で、控えめに試みられたのみだった。姜永錫，金龍濟から，宋鎮禹，金大羽，金鴻亮（黄海道大地主）らに対して働きかけを行ったが、彼らは好意的立場の表明のみで運動組織には加わらなかった。また、現有運動員同士の連絡すらままならず、姜永錫と金龍濟が中心となり朴熙道や張徳秀，中島命門の家をまわり「主客三人会議」を行うのが常だったという（「金龍濟回顧」A，268頁，同B，174～175頁）。前述のように、朝東連代表朴熙道にも具体的な報告は伝えられなかった。

このように、朝鮮において東亜連盟運動は、一部人士の漠然とした共鳴感のある程度得ていたとはいえ、日本国内のような合法的組織を持つことができず、秘密組織朝東連の運動の実質はかなり乏しいものだった。

その直接的な背景には、第一に、運動を取り巻く厳しい状況があった。元共産主義者を集め、朝東連が置かれた東洋之光社は常時憲兵の監視を受けていたという（「金龍濟回顧」A，265頁）。また、東亜連盟運動自体、朝鮮では事実上禁圧されていた。早くも、東洋之光社を『東亜連盟』取次所にしたのと同じ頃、1940年5月、朝鮮総督府警務局は、東亜連盟運動が「民族主義運動に転化の虞多分にあるを以て之を阻止する」、機関誌等出版物の取締を行い、関係者の動静も内査するという取締方針を示した通牒を発している⁸⁸⁾。事実、同年中、『東亜連盟』6月号所載、陶山敏「新秩序に於ける朝鮮の再認識」、同10月号所載「東亜連盟と民族協和」、あるいは3月に行われた石原の講演録「満洲建国と支那事変」が、警務局の検閲により、「民族協和思想ニヨリ朝鮮独立ヲ暗示セシムル」などの理由で、朝鮮内では削除処分とされた⁸⁹⁾。

また翌1941年1月、日本政府は東亜連盟協会をはじめとする「興亜諸団体」の統合に乗り出す方針を閣議で決定し、東亜連盟運動に圧迫を加えた。朝鮮では、警務局がこれに合わせた談話を発表し、明らかに東亜連盟運動を念頭におきつつ「朝鮮民族も他の諸民族と同等の地位に立ち内政の独立を図るための運動なりと誤解」している者や「運動に便乗して朝鮮独立の野望を実現すべく民族運動に転化せしめんとする者」に対し、「一層嚴重なる取締を加ふる決心」を示している⁹⁰⁾。

こうしたことと関わって、朝東連の運動が発展しなかった理由の第二は、活動の中心となっ

た転向者のグループが、間もなく東洋之光社を離れるのを余儀なくされたことである。姜永錫は、『東洋之光』1940年7月号から掲載した「皇道朝鮮」（前述）が総督府の検閲で「不穩論文」として掲載禁止処分となったこと、また、「ちょうど朝鮮東亜連盟の日本連絡代表として、東京へ派遣される必要があった」ことなどがきっかけとなり、東京に移っている（「金龍濟回顧」C, 40頁）。恐らく1941年初め頃と思われる⁹¹⁾。また、金龍濟も、1942年9月東洋之光社を辞し朝鮮文人協会総務部常務となり、緑旗連盟機関誌『緑旗』の編集にも加わった。

朝東連の組織は日本敗戦時まで存続したといわれる⁹²⁾が、以上の様相から見て、その活動は少人数のグループによる意見交換というレベルを超えるものではなく、それすらも維持しえたかどうか疑問に思われる。姜永錫とも何度か接触したことのある曹寧柱が、後年語ったところでは、前掲表2の人物の内、姜永錫、朴熙道、張徳秀、藤田玄太郎が東亜連盟論に共鳴していたことは知っていたものの、彼らが組織的な運動を行っていたという認識は持っていなかった⁹³⁾。

現実には、朝東連に参加した朝鮮人がより活発に行っていたのは、あからさな対日協力だった。運動の舞台とされた東洋之光社は「親日言論の巢窟」と目され（「金龍濟回顧」B, 131頁）、総督府の補助を受けて同じく皇民化政策の旗振りをした緑旗連盟からは、「姜永錫氏は真面目な情熱家、透徹せる理論の持主である。……姜永錫氏は、正しき日本国体観を与へるのに重点をおいて居るが、金龍濟、金漢卿氏〔東洋之光社社員、元朝鮮共産党中央執行委員〕は、内鮮一体のもっと柔かい親しみ深い文化運動を力説して居る。いゝ組合せである」と称賛されていた⁹⁴⁾。かかる当局への迎合ぶりは、東亜連盟運動の中心たる石原にとってすら許容しがたいものだった。朝東連代表たる朴熙道は、京都に石原を訪ね、曹寧柱を介して面会を乞うたところ、総督府の片棒を担っていると石原からいわれ一旦面会を断られたことがあるというが、ありうる話である⁹⁵⁾。金龍濟の回顧するように、朝東連参加者が民族独立の方策を胸の内に持っていたのだとしても、それは本人だけに通じる免罪符でしかなかった。

4 姜永錫の運動・補遺

姜永錫は、東京に移った後も「たまに帰国して、同志たちに報告したが、朝鮮内の運動は足ぶみ状態」だった（「金龍濟回顧」C, 52頁）。かたわら、姜は、日本国内を中心に、場合によっては石原に諮ることなく活動を行った、とされている。金龍濟の回想に従えば、次のような2つの事件があった（〔〕内は引用者による注記）。

①1941年、独ソ開戦（6月）に呼応して武力北進論を唱えていた亀井貫一郎〔元社会大衆党幹部〕と姜永錫が接触し、日本の対ソ連参戦と同時に「赤軍内10万名の朝鮮人兵力に反乱をおこさせ」、その見返りに朝鮮独立を実現させる計画を練った。亀井との接触は朝東連に伝えられ、密約を成立させるため「北進下関会談」が開かれた。会談では、代表に指名された張徳秀

のかわりに羅景錫が出席し運動資金として3万円を拠出した。この内、2万円は下関在住の同志木村勘一郎⁹⁶⁾が立て替えた（以上、「金龍済回顧」C, 53～56頁）。

②1943年、日本敗戦を予測する石原が、姜永錫に対し、「朝鮮独立という非常時に、それを鎮圧する朝鮮総督府の警察力・政治力を朝鮮軍が断乎しりぞけて、無血占領する」計画を明らかにした。姜から計画を知らされた朝鮮軍司令官板垣征四郎は賛意を示した。姜らは板垣の指示を受け、第20師団「龍山」参謀長臼井儉吾と会談を重ね、前向きの感触を得た。これらの経過は姜から石原に逐一報告された。かたわら、姜は、建国資金を得るため、上海在住の朝鮮人資本家孫昌植と接触をはかろうとする。これについては石原に反対されたため、和田勲〔東亜連盟同志会会長〕の力を借り上海行きを実現させようとした。結局これらの運動は、板垣が第7方面軍に転出し〔1945年4月〕、また、姜の腹心だった李景洙が情報を当局に流したため頓挫した（以上、「金龍済回顧」C, 59～60, 76～85, 92～95頁）。

両事件は「実に夢のような話」「奇想天外」（「金龍済回顧」C, 54, 60頁）と金龍済自身記している。しかし、これらが全く無から作られたフィクションとも思われない。

①のような話は、資料源を異にする別の書にも次のように伝えられている。

「姜永錫（朝鮮東亜連盟同志会代表）が、昭和16年5月ころ下関において東亜連盟の幹部和田中将〔和田勲〕（満洲国）その他と会談し、当時石原中将の主張していたところの『独ソ開戦に呼応して日ソ開戦へ』の具体策を決議し……ただちに憲兵隊と総督府当局に探知されて手配された」⁹⁷⁾。

1941年前半、独ソ開戦に乗じようとする北進論に関わって、姜永錫をはじめとする朝東連のメンバーが下関で何らかの会合をもったことは確かなようである。しかし、参加メンバーの記述などに大きな違いがあり、また、会合の意図もはっきりしないが、今のところこれ以上の手がかりは見つかっていない。いずれにせよ、対ソ参戦が実現しなかったために具体的な運動とはならなかっただろう。

②については、日本敗戦前後の石原とも接触の機会のあった山口重次が、「石原の同志、いかえると、東亜連盟同志会の会員は、朝鮮には非常に多かった。みな朝鮮独立運動を目ざしていたが、敗戦前後、彼等はたえず石原と連絡していた」⁹⁸⁾と書いていることとの符合が気にかかるが、ここでは、姜と接触をもったとされている朝鮮軍司令官（1945年2月から朝鮮軍管区司令官）板垣征四郎と東亜連盟運動の関係についてのみ検討しておきたい。

石原とともに満洲事変を実行し、陸軍内「石原派」の有力人物だった板垣は、東亜連盟の構想にも共鳴しており、1940年、支那派遣軍参謀長として発表した『派遣軍将兵に告ぐ』で東亜連盟結成を呼びかけている。1941年7月、朝鮮軍司令官になってからも東亜連盟運動に関与していたことは、東京・上海で活動した木村武雄（東亜連盟協会会長）と面会したり、木村の友人を介して連絡を取りあったりしていたことによって知られる⁹⁹⁾。また、「朝鮮軍司令官だっ

た板垣大将はしばしば朝鮮青年たちと龍山の官邸で会って」いたとの証言もあり¹⁰⁰⁾、曹寧柱も、1944年春、朝鮮で板垣と面会したという¹⁰¹⁾。

こうしたことから推測すると、朝鮮軍司令官板垣が東亜連盟運動に好意を寄せ、朝鮮人の運動組織もその存在を知らながら黙認した、位のことはあったかもしれない(注91)参照)。その点では、東亜連盟運動をあくまで禁圧しようとする総督府と板垣の間には意見の違いがあったことになろう。しかし、だからといって、朝鮮軍司令官が日本敗戦時の朝鮮に対する処置という重大問題についてまで、総督府との間に大きな方針の差があったかとまで考えられるだろうか。

朝鮮軍参謀長として板垣の側にいた高橋担は、「板垣閣下は支那関係の大先輩であり、満洲国の創設者であり、しかも朝鮮へ赴任前、支那派遣軍の総参謀長であったので、大陸問題について大なる抱負を持っておられた筈であるが、私が特に感銘したことは、閣下が過去の経歴や抱負に全然こだわらず、朝鮮軍本来の使命に徹底された点であった」として、軍司令官、参謀長、総督、政務総監の四者で定期的に会談を行い「総督府と軍との関係は依然極めて良好に維持され」たと回想している¹⁰²⁾。

大陸問題についての板垣の「大なる抱負」とは、東亜連盟論を援用しつつ日中戦争早期収拾の立場をとり、桐工作を進めたことなどを指していると思われる。また、小磯総督との協力関係を強調しているのは、東亜連盟運動と関係の深い満洲国協和会に対し、小磯が関東軍参謀長時代(1932～34年)、圧迫を加えたことも念頭にあるのかもしれない。しかし、板垣・小磯は、そのような過去のいきさつに「全然こだわらず」、意志疎通の強化につとめた、というのである。朝鮮軍司令官板垣において、東亜連盟論という持論によって軍人政治家としての行動が動かされていた部分は明らかに限定されていた。

②の事件も裏付けとなる資料は乏しいが、少なくとも、前段に述べられている朝鮮軍との関係については相当割り引いて考えねばならないだろう¹⁰³⁾。

おわりに

植民地朝鮮における転向は、権力の強制によってもたらされた面が大きかったが、そのことは、転向者が内面的な思想転換を必ずしも自覚せず、むしろ民族の「幸福」の追求という言葉で主体的な一貫性を強調する傾向をも生みだした。朝鮮人共産主義者の転向は、いわば「被強制性のなかの自発性」という外観を強く帯びることになった。1920年代半ばから30年代はじめにかけ、光州で共産主義運動に携わり、日中戦争前に転向した姜永錫もそのような思考様式を示した一人だった。

日中戦争期、姜は、新しい運動の手がかりを、まず里見岸雄の日本国体学に求めた。日本国体のもとでの日本人と朝鮮人の「同権利同義務」を説く里見の活動を支持し、1938年から翌年にかけて、「鮮満巡講」に従い、東亜協和理念研究所設立委員会を結成した。そして姜は、この運動の後半と重なりながら、1939年頃から、石原莞爾を理論的指導者とする東亜連盟運動に重点を移した。この運動は、旧民族主義右派の人士も取りこみながら、東洋之光社を表面団体とした地下運動として展開された。姜を中心とした両運動は、片や内鮮一体論と同様の発想をもち、片や朝鮮人皇民化政策の実態に一定の批判をしたとはいえ、構成員がかなり重なり、思想的にも朝鮮独立運動としての枠組みを持たない点は共通していた。また、いずれも、朝鮮人独自の運動体をもたず、既存の、しかも日本人を主体とする運動に加わるという形で展開された運動であり、政治的活動として見るべき成果をあげたともいいがたい。

しかし、最終的に姜永錫らが、総督府から危険視された東亜連盟運動のような運動に立ち到ったことは、彼らの転向運動が、親日派の御用運動ないしその亜流という枠組みに必ずしも収まりきらなかったことも意味している。それは裏を返せば、そこに権力の強制ばかりでなく自発的意志が働いていたことを物語るものでもある。

ところで、姜永錫のように、政治的活動への意志を具体的な行動にまで転化しえた転向者は、実際には必ずしも多くはなかったと思われる。姜らが東亜連盟運動に関わりはじめた1939年、ある日本人は、次のような指摘をしている¹⁰⁴⁾。

「半島の転向者は、嘗ての思想を放棄し、又は嘗ての思想宣伝を一時中止してゐると言った様な形であって、一向に言ふところの転向、又は飛躍ではない様である。内地の転向者には行先が決つてゐるが、半島の転向者には其の方向が決まつてゐないらしい」。

姜永錫自身も、朝鮮の転向者について、「収容、強制指導委任等々の言葉が彼等を恐怖に戦かした」のであり、「元々理解してゐない所へ、時局に推された為に嫌々乍ら引きづられる」形になるのは当然だと述べ、「これ未だに過去の世界観に優る世界観を知らぬ為め」だとしている¹⁰⁵⁾。これらの観察に従うならば、朝鮮人転向者は一般に運動への意志を残してはいてもそれを具体的に示すための思想的立脚点を持たなかったのに対して、姜は、例外的に、「過去の世界観に優る世界観」を手に入れ、そこから新たな運動を展開したことになる。

朝鮮人転向者には共産主義を放棄した後も運動の意志を有し、それを生かす場を求めた者もいた。反面、その具体的表現としての転向運動は、当人の主観的表明とは離れ、朝鮮民族解放運動としての枠組みをもたなかった。姜永錫の軌跡は、このような運動への意志と現実の運動との乖離を、朝鮮人転向者としては稀な明確さをもって示したといえるだろう¹⁰⁶⁾。

凡 例

- 1 引用文中の〔 〕は引用者による注記，……は引用者による略記を表す。
- 2 引用文の漢字は当用漢字に改め，聯盟と記すべきところを連盟と表記するなど若干手を加えた。
- 3 「満洲」，「京城」，「内鮮一体」，「皇民」等の括弧を省略した。
- 4 東亜連盟運動において姜永錫の同志となった金龍済の回顧については次のような略記を用いる。
 - ・金龍済「告白的親日文学論——大村教授에게 답하는 偽装親日文学의 真相——」（『韓国文学』第58号，1978年8月）→「金龍済回顧」A。
 - ・金龍済自筆稿「親日派の独立運動——大村教授に答える偽装親日文学の真相——」（1978年か，コピー版大村益夫氏所蔵，日本語）→「金龍済回顧」B。
 - ・金龍済自筆稿「地下灯——朝鮮東亜連盟の独立運動と日本東亜連盟の石原莞爾將軍——」（1991年か，コピー版大湊義博氏所蔵，日本語）→「金龍済回顧」C。

注

- 1) 朝鮮総督府警務局編刊『最近に於ける朝鮮治安状況 昭和十三年』（復刻，巖南堂書店，1978年）20頁。
- 2) 金石範『転向と親日派』（岩波書店，1993年）10頁。親日派研究については，李憲鐘「親日派 問題에 대한 研究現況과 課題」（李ほか編『親日派』学民社，1990年）が現状を整理しているが，「転向」という問題を意識した研究はほとんどない。朝鮮人の転向についての専論は，藤石貴代「朝鮮転向文学小考」（『年報朝鮮学』第4号，1994年5月），김민철「日帝下 社会主義者들의 転向論理」（『歴史批評』第28号，1995年2月）などがあるほか，徐大肅『朝鮮共產主義運動史 1918～1948年』（邦訳，コリア評論社，1970年）202～204頁に言及が見られる程度である。
- 3) 金石範，前掲書，10頁。
- 4) 本田秋五『転向文学論 第3版』（未来社，1976年）216頁。
- 5) この系列の研究の研究史については，藤石，前掲論文，参照。
- 6) 伊藤晃『転向と天皇制——日本共產主義運動の1930年代』（勁草書房，1995年）7頁。伊藤隆「旧左翼人の『新体制』運動——日本建設協会と国民運動研究会——」（同『昭和期の政治＜統＞』山川出版社，1993年）も参照。
- 7) 김민철，前掲論文，238頁。
- 8) 朝鮮における「思想犯（治安維持法違反）転向人員」の推移は次の通り。1930年—143名，31年—115名，32年—361名，33年—493名，34年—614名，35年—411名（「転向者にして再び治安維持法に違反したる者に関する調査」『思想彙報』第6号，1936年3月，94頁）。
- 9) 出典は，本文表1を参照。なお，ここでは「転向者」は「詭激思想ヲ抛棄シ」た者，「準転向者」は「詭激思想ニ動揺ヲ来シ将来之ヲ抛棄スル見込アルモノ」および「詭激思想ハ抛棄セサルモ将来一切ノ社会運動ヨリ離脱センコトヲ誓ヒタルモノ」とされている。
- 10) 김민철，前掲論文，239～240頁。
- 11) 以上，「鮮人思想犯転向者は如何なる保護を希望するか」（『思想彙報』第6号，1936年3月）98，100頁。
- 12) 「大東民友会の結成並其の活動概況」（『思想彙報』第13号，1937年12月）52頁。大東民友会は，転

向者保護救援団体白岳会（1936年2月結成）を前身とし、36年9月、120名の転向者を正会員として結成した。大アジア主義による国家統合のもとでの「諸民族の平等」を唱え、1938年には、国民精神総動員朝鮮連盟に参加している。

- 13) 鶴見俊輔「転向の共同研究について」（思想の科学研究会編『共同研究 転向』上巻，平凡社，1959年）6頁。
- 14) 徐仲錫「日帝時期 社会主義者들의 民族觀과 階級觀」（同『韓国近現代의 民族問題研究』知識産業社，1989年）15～16頁，参照。
- 15) 「在京鮮人転向者の情况」（『思想彙報』第13号，1937年12月）199頁，富士原景樹「朝鮮に於ける思想犯の保護対策」（『司法協会雑誌』第15巻9号，1936年9月）123頁。
- 16) 前掲「大東民友会の結成並其の活動概況」38頁。
- 17) 李斗峰「朝鮮新人論（其三 車載貞論）」（『朝鮮及満洲』第366号，1938年5月）65頁。
- 18) 「身上記録（姜永錫）」（国史編纂委員会編『韓民族独立運動史資料集』別集第1巻，景文社，1991年）57頁。
- 19) 田中香浦氏の筆者に対する談話（1996年7月24日）。田中氏は田中智学の孫で，姜永錫が後年師事した里見岸雄（後述）からは甥に当たる。
- 20) 辛珠柏「1925～1928年時期 全南地方 社会運動 研究——朝共全南道党의 組織과 活動을 中心으로——」（歴史問題研究所編『韓国近現代地域運動史』第2巻，여강出版社，1993年）197頁。
- 21) 『朝鮮日報』1927年9月25日。
- 22) 朝鮮総督府警務局「光州，京城に於ける学生事件の裏面並学生秘密結社及其の系統」（1929年12月，姜在彦編『光州抗日学生事件資料』風媒社，1979年）360頁。以下，醒進会については，김성보「光州学生運動과 社会主義青年・学生組織」（『歴史批評』第4号，1989年3月）120～124頁による。
- 23) 朝保秘第465号「朝鮮共産青年会並朝鮮学生前衛同盟檢挙ニ関スル件」（1930年4月，梶村秀樹・姜徳相編『現代史資料』第29巻，みすず書房，1972年）375～377頁。
- 24) 京高秘第8036号「秘密結社朝鮮共産党並ニ高麗共産青年会事件檢挙ノ件」（1928年10月，梶村・姜徳相編，前掲書）103～104頁。
- 25) 「朝鮮共産黨員身元調」（『思想月報』第4号，1931年7月）其七。姜永錫の項には，犯時年齢「二十一歳」「無職」「平黨員」「懲役二年六月」などの記載がある。
- 26) 『朝鮮日報』1933年10月20日夕刊。
- 27) 前掲「身上記録（姜永錫）」57頁。
- 28) 『朝鮮中央日報』1933年10月22日。『朝鮮日報』1933年10月20日夕刊，10月21日，10月22日夕刊。
- 29) 姜永錫「皇道朝鮮」（二）（『東洋之光』第1巻第8号，1939年8月）74頁。
- 30) 林鍾国『親日派——李朝末から今日に至る売国売族者たちの正体——』（1991年，邦訳，御茶の水書房，1992年）176頁。なお，姜自身は，1939年8月に発表した文章の中で「私は唯物弁証法を，自分の世界観として持ち来る事，つい二年前まである」と述べている（前掲「皇道朝鮮」（二），74頁）。
- 31) 姜永錫「国体覚認——朝鮮に於ける王道文化運動の世界史的意義——」（『王道文化』第3巻第6号，1940年7月）3～9頁。この文章は「昭和十三年中秋」に書いたと記されている。
- 32) 里見岸雄『閩魂風雪七十年——明治・大正・昭和三代体験史——』（錦正社，1965年）306頁，同『順逆の群像』（里見日本文化化学研究所，1974年）87～90頁。なお上内彦策は，元々熱心な日蓮教信者で，1928年忠清北道警察部長に就任したのを皮切りに警察畑を歩み，配下の警察官に「日本精神」の確立を説いた（阿部薫『朝鮮人物選集』民衆時論出版部，1934年，385～387頁）。第1次「鮮満巡講」以来里見と面識を持ち，里見および田中智学の著書も読んでいた上内は，里見に総督府囑託を依頼し

- たばかりでなく、朝鮮警察官を讀者とする『警務彙報』に里見の憲法学講義を連載させ（1935年6月から11月まで）、平安南道知事となった37年には、里見著『中等日本国体読本』（里見日本文化化学研究所、1937年）を同道の公立中等学校での副読本に採用している。
- 33) 小冊子の現物には、刊行者、刊行年月の記載は見あたらなかったが、日本国体学会編刊『里見日本文化化学研究所三十年史』（1955年）59頁は、「朝鮮総督府〔警務局〕保安課」から1935年9月に刊行されたとしている。
- 34) 日本国体学会編、同前、12頁。
- 35) 里見における国体論と民族観の問題については、小熊英二『単一民族神話の起源——〈日本人〉の自画像の系譜』（新曜社、1995年）143～144頁、も参照せよ。
- 36) 宮田節子『『内鮮一体』の構造』（同『朝鮮民衆と『皇民化』政策』未来社、1985年）参照。
- 37) 金振九『国癌切開』（名古屋出版社、1936年）61～62頁。
- 38) 金鎮勇「如何に生るべきか」（『国体学雑誌』第192号、1938年9月）43～44頁。なお、『国体学雑誌』は本文にあげた『社会と国体』の後継誌である。
- 39) 里見、前掲『闘魂風雪七十年』309頁。
- 40) 里見門下生で姜永錫とも親交のあった原田政盛氏によれば、姜は1937年5月、朝鮮での里見の講演を聴いていたという。原田氏はこのことを、翌年8月の国体科学夏期講習会で姜から直接聞いたとしている（筆者宛原田政盛私信、1996年8月15日、9月1日）。有力な証言ではあるが、氏の指摘する1937年の里見の巡講は専ら官吏相手の講演であり、一般の朝鮮人と接触した形跡は残っていない（大王学人〔里見の筆名〕「満鮮・旅の余滴」『国体学雑誌』第179号、1937年8月）。里見が「主として道庁に於ける対官吏講演を、成るべく、対市民講演とする方針をとった」のは翌1938年からであり（里見「旅信の二」『国体学雑誌』第191号、1938年8月、52頁）、姜との接触もこの年になってからと考える方が自然ではある。実際、姜永錫「東亜協和理念研究所設立の趣意書」に対する「編者日」（『国体学雑誌』第202号、1939年3月、61頁）では、姜と里見の出会いを1938年としており、ここでは一応そちらに従っておいた。
- 41) 原田、前掲私信、1996年9月1日、田中、前掲談話。なお、「金龍濟回顧」ほかの資料で、「藤田源太郎」「藤田健太郎」としているものがあるが、藤田自筆の文章は「藤田玄太郎」名で書かれているので、本稿ではそちらの表記に従った。
- 42) 以上、「金龍濟回顧」C、69頁。ただし、金龍濟の回顧には事実認識について無視しえない問題点がある。「金龍濟回顧」B、150～151頁によれば、姜永錫が「韓民族の実利をはかり、ついには完全な政治的自治（事実上の独立）を実施させる」という考えを、里見を中心とする「日本の皇道学界に公認させ」た、とされている。これは本章で明らかにするように事実とかけ離れている。しかし、姜永錫と里見の対面の場面についていえば、大田から清州に向かったとする里見の行程の記述は正確であり（「里見先生満鮮大巡講日誌」『国体学雑誌』第192号、1938年9月、54頁による。6月7日から8日の日程と金の記述が一致している）、この部分は一応信頼してよいと考えた。
- 43) 小野よし子「安心の燈火」（『国体学雑誌』第192号、1938年9月）51頁。
- 44) 「国体科学夏期講習会通記」（同前）42、47頁。
- 45) 以下、姜永錫「里見先生鮮満巡講動報——全南に揚る国体主義の狼火——」（『国体学雑誌』第194号、1938年11月）54～63頁による。
- 46) 『里見岸雄日記』1938年10月3日の条（同日記は里見てるこ氏所蔵。同日記コピー版の閲覧については、河本學嗣郎氏の御厚意を得た）。
- 47) 姜永錫、前掲「東亜協和理念研究所設立の趣意書」61頁の「編者日」。

- 48) 姜永錫，前掲「東亜協和理念研究所設立の趣意書」63頁。同委員会の綱領の他の項目は次の通り。
「本研究所は世界民族の共存共栄理想社会実現の基盤となる日鮮両民族の協和理論の研究確立を期す」
「本研究所は世界史的意義を持つ光栄ある新東亜建設運動に於ける朝鮮民族の歴史的文化的意義を昂揚しその実践理論を確立す」。
- 49) 原田政盛『激動昭和の一断面——里見岸雄先生と私』（日本国体学会，1985年）111頁。
- 50) 同前，204～205頁。
- 51) 以下，前掲『里見岸雄日記』1939年6月8日～6月15日の条，および里見岸雄『鮮満学動記（上）——朝鮮の巻——』（『国体学雑誌』第212号，1939年8月）33頁～41頁。
- 52) ただし，前出の東亜協和理念研究所設立委員会は，朝鮮軍参謀部編『昭和十四年後半期 朝鮮思想運動概況』（1940年2月），同『昭和十五年前半期 朝鮮思想運動概況』（1940年8月）（宮田節子編『朝鮮思想運動概況』不二出版，1991年，212，272頁）によれば，1939年後半から40年前半にかけ，会員は4名から7名に増え，活動状況も「見ルヘキ活動ナシ」から「目下姜，藤田ハ東上シ中央部同志ノ結成ニ奔走シアリテ注意ヲ要スルモノアリ」と活発化している。あるいは，同委員会を次節に述べる東亜連盟運動のための足場にしたのかもしれない。
- 53) 拙稿「東亜連盟論における朝鮮問題認識——東亜連盟運動と朝鮮・朝鮮人（1）——」（『世界人権問題研究センター研究紀要』第1号，1996年3月）。
- 54) 以下，天野道夫「玄永燮の創氏名」「東亜聯盟論의 擡頭와 内鮮一体運動과의 關聯」（『朝光』第6巻第7号，1940年7月）215～216頁。なお，玄永燮とその急進的内鮮一体論については，宮田，前掲論文，159～162頁，参照。
- 55) 東亜連盟協会編『東亜連盟建設要綱（第2改訂版）』（立命館出版部，1940年）67頁。
- 56) 以下，上田龍男「李泳根の創氏名」『朝鮮の問題と其の解決』（京城正学研究所，1942年）30～31，60～61頁。この資料は水野直樹氏より提供を受けた。
- 57) 朝鮮総督府編『昭和十六年十一月 第七十七回帝国議会説明資料』（『朝鮮総督府帝国議会説明資料』第2巻，不二出版，1994年）241頁。
- 58) 「金龍濟回顧」Cによる。石原は，里見の父田中智学の創設した国社に1920年入会している。石原は，1923年からのドイツ駐在以来里見と深い親交を結び，里見の日蓮解釈や国家観にも共鳴していた。後に石原が東亜連盟運動を主導するようになってからも，里見は，運動理念の「王道論」の普遍的価値の説明を試みている（松沢哲成『日本ファシズムの対外侵略』三一書房，1983年，326～329頁）。姜永錫と里見，里見と石原の関係から見て，姜が東亜連盟運動に接近したのは里見の紹介によるとする「金龍濟回顧」Cの記述は妥当だろう。
- 59) 「金龍濟回顧」C，1頁では，「日本文化研究所の里見岸雄が主宰した夏期研修会を終えた翌日，姜永錫は里見の紹介で，石原会見に馳せて行った」とし，これを1939年8月のこととしている。確かに，1939年8月には国体科学夏期講習会が開かれているが，この時，石原は舞鶴要塞司令官から留守第16師団司令部付となっており，また，『東洋之光』も既に刊行された時点であり，前後の文脈が繋がらなくなるため，金龍濟の回顧のこの部分は本稿では採用しなかった。
- 60) 以下，原田，前掲書，200，203頁。
- 61) 文彰会は，1939年2月から3ヶ月間日本国体学会で里見の指導を受け，里見門下の朝鮮人としては最も日本国体学に傾倒したという（「文彰会氏の帰鮮」『国体学雑誌』第210号，1939年7月，59頁，里見，前掲『順逆の群像』352頁）。
- 62) 大村益夫『愛する大陸よ——詩人金竜濟研究』（大和書房，1992年）158～159頁。これは「金龍濟回顧」Aに対する評である。

- 63) 金昌南宛石原莞爾書簡, 1940年12月23日(『石原莞爾資料(マイクロフィルム)』国会図書館憲政資料室所蔵, リール2の内「師団長時代」所収)。前掲, 拙稿, 77~78頁参照。
- 64) 曹寧柱「石原莞爾の人と思想」(石原莞爾生誕百年祭実行委員会編『永久平和への道——いま, なぜ石原莞爾か』原書房, 1988年) 226頁。
- 65) 東亜連盟運動を独立運動と考える金龍済の思いこみが, 運動当時から存在したものなのかどうか確言することは困難である。大村, 前掲書, 163頁は, 「情報が乏しい上に, 心身ともに困窮の境にあった金竜済は, 東亜連盟を抗日組織と錯覚したに違いなかった」と推測し, 金の誤認が運動当時からあったと見ているようである。一つの解釈としてありうるだろう。「金龍済回顧」A, 268頁, 同B, 153頁は「東亜連盟の朝鮮問題テーゼ」なる文書があったとし, これは建前としては朝鮮「自治」のもと日本が「軍事・外交を後見」し, 後見が必要なくなれば「完全独立」を認めるという内容のものだったと主張する。もとより石原の全集や文書類にこのような文書は見あたらないが, 日本の「後見」から「独立」へという道筋は, 満洲国について, 東亜連盟論が説いていたところであり(東亜連盟協会編, 前掲書, 96頁など), 金龍済が運動当時, これを拡大解釈して東亜連盟論に朝鮮独立の論理を見いだした可能性は捨てきれない。しかし, 後述のように, 同時代の資料の中で実際に姜永錫らが示しているのはむしろ朝鮮独立を否認する論理であり, また, 金龍済の事実認識の問題点が, 現在の価値観にそって過去を再解釈していることに起因していると思われる点も多い。里見から直接教えを受けていない金龍済が日本国体学に対して示している恣意的評価(注42)参照)はその典型だろう。
- 66) 李恒発は, 朝鮮共産党, 新幹会に参加した経歴を持つ。1920年代, 朴熙道主宰の『新生活』に寄稿しており, また, 光州学生運動では姜永錫と接触していることから見て, 朴・姜両者と面識があったはずである。
- 67) 坪江汕二『改訂増補 朝鮮民族独立運動秘史』(巖南堂書店, 1966年) 246頁では, 「朝鮮東亜連盟同志会」としている。
- 68) 白土菊枝(旧姓小泉)は, 戦前, 東亜連盟協会中央参与会員重鎮だったが, 戦後1978年にソウルで金龍済と姜永錫に面会するまで, 彼らの運動を知らなかったという(白土『將軍 石原莞爾——その人と信仰に触れて』同刊行会, 1992年, 326~327頁)。
- 69) 坪江, 前掲書, 246頁は, 「朝鮮東亜連盟同志会」のメンバーとして, 会長張徳秀, 常任世話役姜永錫, その他資金提供者として金性洙, 羅景錫を挙げている。参加者名は金龍済の回顧と重なるが, 役割分担の記述が若干異なる。また, 表2以外の人物が関わった可能性もないではない。たとえば「金龍済回顧」A, 同Bでは名が出ていないが, 同C, 28頁では, 正式盟員(外交責任者)として朴錫胤があげられている。朴が東亜連盟論の共鳴者だったことは事実だが, 活動の中心は朝鮮ではなく満洲だったと思われるので(前掲, 拙稿, 参照), 表2に入れなかった。その他, 曹寧柱氏の筆者に対する談話(1996年2月21日)では, 朝鮮における東亜連盟運動の重要人物として, 禹漢竜という人物をあげている。禹は朝鮮と日本を往復して運動に携わったという。もっとも禹は, 戦後直後, 朴烈系の在日朝鮮人無政府主義者を集めた促進会(1945年10月結成)に参加していることから見て(鄭哲『民団——在日韓国人の民族運動』洋々社, 1967年, 36頁), その運動拠点には日本にあったのではないかと思われる。
- 70) 並木真人「植民地期民族運動の近代観——その方法論的考察」(『朝鮮史研究会論文集』第26号, 1989年3月)。
- 71) これらの人物が東亜連盟論に共鳴していたことは恐らく事実だろう。曹寧柱, 前掲談話も, 宋鎮禹は熱心な東亜連盟論者だったとしている。また, 石原「日記」1940年3月19日, 11月15日の条に名に見える「金季珠」は金季洙のことと思われる(角田順編『石原莞爾資料——国防論策篇——』原書房,

- 1971年, 346, 367頁)。
- 72) 朴熙道は、姜永錫らから活動の報告を受けていなかった(後述)。また、張徳秀は「一度も『東洋之光』社に顔を出したことがなかった」(『金龍済回顧』B, 174頁)。
- 73) 曹寧柱、前掲談話では、朴、張らが東亜連盟論の共鳴者であることは認めながらも「彼らは東亜連盟運動の『東』の字も知らなかった」と酷評している。
- 74) 五百旗頭眞「東亜連盟論の基本的性格」(『アジア研究』第22巻第1号, 1975年4月) 33~34頁, 松沢, 前掲書, 318~324頁。
- 75) 朴熙道「転向者の新しき進路」(『東洋之光』第1巻第6号, 1939年6月) 3頁。「金龍済回顧」B, 140~141頁によると、『東洋之光』誌上の朴熙道名の論説は、日本語文章能力の不十分だった朴にかわり、金龍済が「彼〔朴熙道〕の論旨の要点をメモにとって、適当に潤色代筆した」ものという。
- 76) 姜永錫「皇道朝鮮」(一)(『東洋之光』第1巻第7号, 1939年7月) 60~61頁。
- 77) 『王道文化』は、1938年2月創刊の精華会機関誌。精華会は、1934年10月、国柱会の青年部として結成された日蓮主義系団体だが(田中香浦編『国柱会百年史』国柱会, 1984年, 255~257頁)、同会に一時期参加された田中香浦氏の前掲談話によれば石原莞爾の思想に共鳴する者が主流を占め、次第に「東亜連盟運動の下部機関」の性格を強めたという。1940年1月、石原が「精華会協議会で……精華会は国柱会のいわば前衛として現代における立正安国運動である東亜連盟運動の中核として邁進せよ」と説いた頃が転換点と思われる(白土, 前掲書, 291頁)。
- 78) なお、姜永錫「国体覚認」の掲載された『王道文化』第3巻第6号の裏表紙見返し「新誌友紹介」欄には「光州同人会同人」として姜の名が記されている。「国体覚認」の掲載には精華会同人にもなっていた姜本人の意志が働いていたと考えられる。
- 79) 藤田は、1939年9月、石原と面会し、40年8月頃には、東京で東亜連盟運動員の曹寧柱、崔殷桓と運動拡大について意見交換をしている(表2参照)。この他、1940年4月、「朝鮮の同志」2名(姓名不詳)と共に東京の精華会本部を訪れ、「朝鮮の現在及将来に関する問題」について議論している(『紅塵のかげから』『王道文化』第3巻第4号, 1940年5月, 31頁)。
- 80) 藤田玄太郎「王道文化と朝鮮」(『王道文化』, 第3巻第10号, 1940年12月) 6, 10頁。藤田はこの他にも『王道文化』誌上に、「最後の出発」(第3巻第3号, 1940年4月)、「朝鮮民族の誇」(第3巻第4号, 1940年5月)などの文を寄せているが、いずれも同趣旨である。また、藤田「東学革新の研究」(下)(『東洋之光』第6巻第9号, 1944年10月) 33頁にも、同様の朝鮮観が窺われる。
- 81) 曹寧柱、前掲談話によれば、石原は藤田のことを「親日派」ならぬ「親鮮派」と呼んでいたという。
- 82) 緑旗連盟機関誌『緑旗』第1巻第8号(1936年8月)の「新連盟員紹介」欄, 54頁には、「光州府藤田源太郎殿」の名が見える。また、同連盟幹部をつとめた森田芳夫は戦後、藤田を「同志」として回想している(森田「李君への手紙」『王道文化』第10巻第5号, 1949年8月, 39頁)。なお、緑旗連盟については、高崎宗司「緑旗連盟と『皇民化』運動」(『季刊三千里』第31号, 1982年8月)参照。
- 83) 「東亜連盟協会ニュース」(『東亜連盟』第2巻第6号, 1940年6月) 120頁。
- 84) 木村武雄『自伝 米沢そんびんの詩』(形象社, 1978年) 164頁。
- 85) 「朝鮮問題に就て」(『東亜連盟』第4巻第5号, 1942年5月) 35頁。
- 86) 平澤光人「東亜連盟の理念と実践」(石原莞爾生誕百年祭実行委員会編, 前掲書) 168頁。
- 87) 高検秘第72号「時局下ニ於ケル思想犯罪ノ防遏ニ関スル件」(1941年2月, 齊藤栄治編『高等法院検事長訓示通牒類纂』1942年, 辛珠柏編『日帝下支配政策資料集』第8巻, 高麗書林, 1993年, 102頁)。「戸澤京城地方法院検事正の管内状況報告」(1943年4月, 高等法院検事局編『朝鮮刑事政策資料 昭和十八年度版』81頁)。両資料は水野直樹氏の提供による。

- 88) 内務省警保局編『昭和十七年中ニ於ケル社会運動ノ状況』831～832頁。
- 89) 朝鮮総督府警務局図書課編『昭和十五年中に於ける朝鮮出版概要』113～117頁。
- 90) 『法政新聞』1941年2月5日。1941年1月の閣議決定については、前掲、拙稿、79頁参照。
- 91) 『東洋之光』誌上で「皇道朝鮮」が第5回まで連載されたこと、第5回（『東洋之光』第1巻11号、1939年11月、所載）が明らかに未完結であることは確認できるが、筆者は1940～41年の『東洋之光』誌を見ることができなかったため、連載がいつの時点で打ち切られたか、したがっていつ姜永錫が朝鮮を離れざるを得なくなったか、は正確には判らない。しかし、1941年4月作成の「東亜連盟東京支部名簿」（『浅沼稻次郎関係文書』305、国会図書館憲政資料室所蔵）15頁によれば、姜は東京市板橋区に住所を置いている。また、同年12月アジア・太平洋戦争の勃発に伴い、特高警察は日本全国で「朝鮮人思想分子」124名を予備検束したが、この時、姜永錫も東京で検挙されている（『特高月報』昭和16年12月分、朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成』第4巻、三一書房、1976年、769頁。このことは「金龍済回顧」C、57頁も触れている）。これらから見て、姜が1941年はじめに東京に移っていたことはほぼ間違いない。
- なお、本文であげた「金龍済回顧」Cの記述とは別に、同B、178～189頁には次のような記述がある。姜が朝鮮内で東亜連盟運動を行っているとの嫌疑で光州地方検事局に検挙されたため、藤田が日本に飛び石原と相談した結果、石原と板垣征四郎朝鮮軍司令官が小磯国昭朝鮮総督に圧力をかけ、姜は釈放された。板垣の薦めで姜は東京に亡命を決意し、この時連載中だった「皇道朝鮮」は警務局保安課から掲載禁止が通達された。——この経過説明では、「皇道朝鮮」筆禍が姜の東京行きの主因ではなく結果とされており、大村、前掲書、158頁もこの説明にしたがった記述をしている。しかし、この事件を、小磯総督の在任期（1942年5月～44年7月）とするならば、1941年中に姜が東京に移っていた事実と整合しない。恐らく、姜が光州で検挙された事件は、東京に移っての後、朝鮮との連絡を行っている際に起こったもので、これと「皇道朝鮮」筆禍による姜の東京行きとを、「金龍済回顧」Bは混同しているのではないかと思われる。
- 92) 坪江、前掲書、246頁。
- 93) 曹寧柱、前掲談話。
- 94) 緑旗日本文化研究所編『朝鮮思想界概観』（緑旗連盟、1939年）50～51頁。
- 95) 曹寧柱、前掲談話。この時のことかどうか判らないが、石原「日記」1939年11月11日の条には朴熙道の訪問が記されている（表2参照）。また、石原は、緑旗連盟の皇民化政策への協力を批判していたから（白土、前掲書、340頁、森田芳夫「明日に生きる石原先生」保坂富士夫編『石原莞爾研究』第1集、精華会中央事務所、1950年、62頁）、同類の東洋之光社の親日活動に批判的だったことは十分考うる。なお、石原のこうした対応に対し、朴熙道は「だから私たちは石原について行くのだ」と述べ、批判を逆に喜んだという。
- 96) 木村勘一郎は、確かに精華会閥門同人会所属の人物として実在する。ただし、その朝鮮観は、朝鮮に対する「侵略主義的帝国主義的植民観」を自戒しつつ「天皇を中心としての朝鮮との同等的合体一統」を理想としており、東亜連盟論の朝鮮論に忠実なものといってよい（木村「朝鮮の序列」『王道文化』第3巻第8号、1940年9月）。
- 97) 坪江、前掲書、246頁。ただし、この時期石原が独ソ開戦を唱えた事実は見あたらない。石原の同時期の講演録でも、ソ連がどれだけドイツに抵抗力を示すか軍事的に関心があると述べているのみである（石原「欧洲大戦の進展と支那事变」角田編、前掲書、487頁）。
- 98) 山口重次『悲劇の将軍 石原莞爾』（世界社、1952年）284頁。
- 99) 木村武雄『政界独言』（土屋書店、1968年）96～97頁。ここには、京都の東亜連盟運動の中心者田

植民地末期朝鮮におけるある転向者の運動（松田）

中直吉に指導を受けた朝鮮人伊東薫（伊東勲－李義根か）を木村に斡旋する板垣の私信2通（1941年か42年のものと思われる）も引用されている。

- 100) 白土, 前掲書, 329頁。
- 101) 曹寧柱, 前掲談話。
- 102) 板垣征四郎刊行会編『秘録 板垣征四郎』（芙蓉書房, 1972年）162～163頁。
- 103) なお, ②に名のあがっている臼井俣吾が第20師団参謀長をつとめたのは1938年7月から翌年12月までであり, 以後, 朝鮮関係の軍務にはついていない。時期的に見て, 金龍濟回顧の臼井に関する部分は明らかに事実と反する。
- 104) 三浦一郎「半島の思想転向者に与ふ——一日本主義者の立場から——」（『東洋之光』第1巻第3号, 1939年3月）23頁。
- 105) 姜永錫「東亜先覚志士記伝の読後感」（『東洋之光』第1巻第12号, 1940年1月）67頁。
- 106) 朝鮮解放後の姜永錫の足跡はほとんど明らかにできなかった。姜萬吉, 成大慶編『韓国社会主義運動人名事典』創作斗批評社, 1996年, 15頁は, 1945年朝鮮共産党光州支部に所属し潭陽郡人民委員会委員を務めた, としている。一方「金龍濟回顧」C, 75頁では, 姜が板垣征四郎の遺族をたびたび慰問し（板垣は1948年A級戦犯として刑死した）, 「かつては共産主義思想にだまされ経験」も語っていた, としている。

（付記） 本稿の作成に当たり, 資料の閲覧や聞き取り調査などについて, 特に以下の方々に大変お世話になった。記して謝意を表したい（順不同, 敬称略）。曹寧柱（故人）, 田中香浦（故人）, 大村益夫, 大湊義博, 水野直樹, 河野信, 平澤光人, 竹中順一, 原田政盛, 河本學嗣郎。